キャリブレーション(Calibration)

fsQCAでは、元のデータを、0-1のメンバーシップ値（membership score）に当てはめる操作のことを指す。工学や自然科学の分野では、キャリブレーションは、既知の値の 試料（例えば標準分銅、標準試料、ブロックゲージ等）を用いて、測定器の感度を調整することであり、この用語の使い方はQCA独特である。QCAでは、「キャリブレーシ ョン」のやり方に、決められた方法はない。分析者が自らの判断で決める。分析者の判 断で入力データの値を調整する行為は、チューニングと言うべきである。これは大変危険で、慎重に、一般的に納得される決め方でやらなくてはならない。データの属性によって、チューニングには様々な方法が考えられる。数値データの場合には、正規分布を仮定して、累積確率密度をメンバーシップ値とするのが一つの方法である。その場合でも、チューニングとして、累積確率0.50のポジションを操作することが、しばしば行われるようだ。その妥当性は、いくつかのチューにングの方法との比較によって確認すべきだろう。5件法や7件法のリッカート尺度を用いたアンケートの回答の場合にも、平均値と標準分散を使って、累積確率密度を計算する方法も考えられないわけではないが、そうすると、どちらでもないという中立的な意見のポジションが、0.50にならない。この場合は、分析者の判断で、メンバーシップ値を割り振るのが現実的であるが、恣意的に操作しているという印象は避けるべきだろう。例えば7件法の場合、強く賛成する、賛成する。どちらかと言えば賛成する、どちらでもない、どちらかと言えば反対する、反対する。強く反対するに対して、賛成の度合い、0.95、0.80、0.65. 0.50、0.35、0.20、19 0.05を割りふる。 5件法の場合、強く賛成する、賛成する、どちらでもない、反対する、20 強く反対するに対して、0.90、0.70、0.50、0.30、0.10を割り振るなどが考えられるが、もちろん、分析者の判断によって、間隔を調整しても良いが、その場合にも、その必要性と妥当性をしっかりと説明すべきである。